



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	家庭科教科書の教育内容構成に関する研究：戦後初期家庭科構想と城戸幡太郎編『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』の教科書分析
Author(s)	青木, 香保里
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7236号
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.r7236
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99852
Type	doctoral thesis
File Information	AOKI_Kahori_review.pdf, 審査の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

氏名：青木 香保里

	主査 教授	大竹政美
	副査 教授	佐々木宏
審査委員	副査 教授	井上えり子（京都教育大学）
	副査 教授	志村結美（山梨大学）
	副査 名誉教授	大竹美登利（東京学芸大学）

学位論文題名

家庭科教科書の教育内容構成に関する研究

－戦後初期家庭科構想と

城戸幡太郎編『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』の教科書分析－

本研究は、籠山京の「生活構造論」を中心的な概念的枠組みとして、戦後初期の家庭科教科書である城戸幡太郎編『わたしたちの生活設計（家庭生活中心）』（1954年～1956年）（以下、城戸編『生活設計』と略記）の教育内容構成を分析したものである。生活構造の視点を分析軸に据えることにより、戦後日本の家庭科教育が「生活を科学的に理解し、合理的かつ民主的に再構成する教育」として成立した過程を、教育思想史・制度史・教育内容構成論の観点から総合的に明らかにしている。さらに本研究は、戦後家庭科成立期の理論的基盤の再検討という問題意識のもとに、海後宗臣・城戸幡太郎・籠山京らの理論に依拠する根拠を位置づけることによって、家庭科とはどのような教科であるかを理論的に再検討する意義を提示している。中学校「技術・家庭」という教科のあり方が見直され、「家庭」と「技術」がそれぞれ独立した教科として再編されようとしている現在、家庭科教育の研究には固有の教科論を再構築することが求められている。本研究は、生活を基軸とする家庭科教科論の理論的源流を再評価し、その現代的意義を示す試みとして注目される。

第1章では、教育思想史的分析によって、戦前から戦後初期にかけて展開された教育科学運動の系譜を検討している。教育科学運動の諸潮流を、「生活」を生産・消費・再生産の循環として把握し、「最小限度の生活の事実」に基づいて基準を定め、協同と計画を媒介にして生活を再組織するという共通の骨格をもっていたと整理する。籠山京については、人間生活を「労働力（作業力）の消費と再生産の循環」として捉え、「主体—目的—手段—条件」

の相互関係から成る「生活構造論」を体系化したと評価している。

第2章では、制度史・カリキュラム史の分析によって、1947年から1957年にかけての学習指導要領（職業・家庭科編）の成立過程と改訂経緯を検討している。戦後家庭科が「生活の科学化・民主化・社会化」という理念を体现する教科として出発しながら、制度標準化と性別固定化の進行によって、その社会的・民主的射程を縮減させていったことを明らかにしている。

第3章では、城戸編『生活設計』とその指導書を詳細に分析し、この教科書の教育内容の体系を読み解いている。籠山京の「生活構造論」に基づいて、城戸編『生活設計』が「生活」を「主体—目的—手段—条件」の構造的連関として把握し、生活課題を科学的・合理的に再構成する教育体系をそなえていたことを明らかにしている。各単元は、「生活の事実の把握—問題の発見—計画と実践—改善と評価」という循環的過程の点から構成され、学習者が自らの生活を科学的に設計する力＝生活設計力を形成することを目指していた。さらに、指導書『指導と解説』は、生活を社会の生産・流通・消費の構造のなかで理解させようとしており、生徒自身が「生活の構造」を意識的に把握しながら、生活の改善や再構築に参加するように導くという考えを提示していた。著者は、城戸編『生活設計』が、生活課題の把握と再設計の過程を学習することを組織し、生活の構造的な理解と改善の力を育成する教育内容体系をそなえたものとして編成されていたことを具体的に明らかにしている。この教科書が「生活設計」の学習過程を中核に据え、技術を生生活改善の手段として位置づけつつ、生活の全体構造を教育内容化していた点に、その独自性を認めている。

終章では、以上の分析結果を総括して、家庭科教育を「生活の構造的な理解と再生産を担う教育」として再定位し、現代的課題に向き合う教育の可能性に言及している。

著者は、教科書を分析する教育方法学的な方法を、算数教科書を対象として模索することを試みた須田勝彦の論考（1983年）に学んだ成果を、家庭科教科書を対象とした研究に独創的に適用していると評価することができる。

研究の基本的な方法としては、学習主体の活動の法則性からアプローチするのではなく、学習対象の内容的分析に基づく方法を採用している。家庭科教育固有の目的論を、学習者が現実の生活過程を抽象化によって構造的に捉え、将来の見通しを持つこととしている。城戸編『生活設計』の分析の際の中心概念であった籠山京の「生活構造」による抽象化が有効であるとして、「生活構造に基づく家庭科教育学の確立」を提唱している。家庭科は、「生活を教える教科」ではなく、「生活を構造的に捉え、再創造する力を育む教科」として再生されるべきであり、生活構造論は、その教育内容体系を理論的に支える中核的な枠組みだということである。

概念系を整備しつつ、家庭科の教育現実について、これまでの展開を説明し、これからの創造に寄与することが著者の今後の課題である。

以上のことから、審査委員会は著者が北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。